

## 「家に仕え、国に仕える」

一か月のサバティカルの間、留守の間の教会をお守りくださり、ありがとうございました。この間、大川先生、また中島先生をはじめ、主にある兄弟姉妹が教会でのミニストリーをお支えくださいましたことを心より感謝しております。

いくつかの思いがけないことが起きた一月でありましたが、それらのことを通しても普段はなかなかじっくりと向き合うことができない課題に向き合うことができました。サバティカルに入りますとすぐに妻の弟夫婦の娘が亡くなったとの連絡が入り、急ぎよ、大分を訪ね、日本にいる間に熊本や大分での地震もあり、以後、私達は被災地から目を離すことができません。被災して避難している方達が心身ともに休める場所を確保することができますように、そしてそれぞれの町の復興がなされますようにと祈ります。

受難週とイースターが三月の末にありましたので、私達の年間の標語となっております「健やかな時も、病む時も、豊かな時も、貧しき時も」のシリーズに即したメッセージは3月13日以来となります。そこで今日はその続きとなりますサムエル記上を見ていきたく願っております。この書はサムエルというイスラエルの預言者の名前からとられたものであり、神様は彼を用いてイスラエルの初代の王、サウロ、そして二代目の王、ダビデがたてられていく様がこのサムエル記上には記されています。今日はこのところからまず最初に「国を治める」ということ、そして二つ目に「家を治める」ということについてお話しします。

### 国を治める

サムエル記は年代としては士師記の後の時代となりますので、士師記とサムエル記には継続した関連があります。すなわち、士師記はその書を閉じるにあたり『**その頃、イスラエルには王がなかったので、おのおの自分の目に正しいと見るところをおこなった**』（士師記21章25節）と記し、そんな400年におよんだ士師の時代、各々が自分の目に正しいと見えるところを行ったと結果、そのことに限界を感じたイスラエルの民が今度はサムエル記において『**今、ほかの国々のように、われわれをさばく王を、**

**われわれのために立ててください』**（サムエル記上8章5節）と自分達に王を与えてくれと願い求めている様が記されているのです。

それまでのイスラエルは各部族の族長がそれぞれの部族をさばき、または士師というリーダーがある期間、断続的に民を導いてきました。ですから、王が国を司る「**王政**」というものは彼らにとって初めての制度ということになりました。そして、それから長い間、この王政がイスラエルの中心に据えられていくことになるのです。

今、私達の暮らす世界は日々、変化しています。アメリカ、日本、世界の動向というものがこれからどうなっていくのかということを私達は注意深く見ていかなければなりません。おりしもアメリカでは今年、大統領選があり、この国のリーダーを私達は決めていきます。それは王が国を司るということとは異なりますが、確かに大統領はこの国のかじ取りのために大きな権力を託されるわけですから、私達が当時のイスラエルが置かれていた状況から得る知恵は多いのです。

士師の時代、人々は各々、自分の目に正しいと見るところをおこないました。そして、それは今日のアメリカも日本も同じなのです。私達は「自由」の名のもとに自分がよかれと思うことをなすことを良しとする世界に生きています。このことは確かに私達の自由の行使なのですが、この自由は私達が大切にすべきものを締め出すというようなことにも用いられているのです。

かつてこの国の公立学校には祈りがあり、公共の場所にも十戒が掲げられていたといえます。しかし、今やそのようなものは一切なくなりました。否、そのように特定の信仰を掲げるといことはよろしくない、丘の上に無言で立っている十字架すらも撤去しようとする訴訟が起きているような現状です。今日、私達はこの国の建国の精神を忘れ、自分に益となるもの、自分の願いをかなえてくれるもの、自分のフラストレーションを軽減してくれるもの、そのようなことを願い、私達の上に立つリーダーを選んでいます。私達はそんなこの国のリーダーを半年後に知ることになります。

そもそもなぜイスラエルの民達は王政というものを取り入れることを願ったのでしょうか。各々が自分の目に正しいと思うことをやっていたという

400年の間に、さすがに彼らはそれでは国は成り立たないということに気がついたのでしょうか。彼らは自分たちに王を与えてくれとサムエルにその希望を告げたのです。そして、この背景にはペリシテという彼らの敵の存在がありました。

ペリシテ人とは当時、地中海の沿岸を占拠している民族で、その支配を広げようと虎視眈々とイスラエルを狙っていました。実際に彼らはとても強力な軍事力を有していました。このような強敵に向き合うにあたり、これまでの士師の時代のようにイスラエルが部族単位で彼らと対峙していたのでは勝ち目はないように民たちには思われ、イスラエル全体をまとめあげてより大きな力でペリシテに対抗しなければならないという思いがイスラエルの民達の中に生まれてきたのです。この状況は今日も変わることがありません。中東地域、アジア地域の動向、そしてこれらに加えてテロリストとの攻防、私達が選ぶこの国のリーダーはこれら諸外国の脅威に向き合い、これから進むべき道を選び、それに向かってリーダーシップをとっていかなければなりません。

こうしてイスラエルの民達の中に「神こそがイスラエルの王」であるという信仰が失われていきました。かつてのイスラエルはこのことによって結束していたのですが、彼らは自分達で自らのことを決めるのではなく、彼らの上に立つ人によってこの国の進む道を決断することを望んだのです。王を立てることにより彼らの間から神様が締め出されていったのです。まさしく、その様は今日、この国で起きていることであります。

その時、イスラエルはどこに向かっているのかという不安も抱えていました。同じように私達も将来に対して不安がないでしょうか。何が起こるのか分からない将来への不安というものは誰でももつものです。自分たちはバラバラで、どこに向かうのか分からない。ある意味、このような危機は信仰に立ち返るチャンスなのですが、イスラエルはそのような時に自分たちを導いてくれる強いリーダーを求めたのです。不安な時代になればなるほど、一見、強行に思えるような政策を進める政治家を求める現代の有様とそれは似ています（かつて強力なカリスマ性と指導力を備え、「日本列島改造」を掲げた総理大臣が日本にはおりましたが、そんなリーダーを待望するような書籍がこの度の訪日の際、本屋に並べられているのをあちこちで見ました）。

当時のイスラエルにおいてこのようなことが起きてきた一つの要因はそれまでイスラエルを導いてきた預言者サムエルが年老いていたということが民の大きな不安となっており（8章5節）、さらに、それはサムエルが年老いていたということだけではなく、その他にも理由があったのです。

このサムエル記の始まりにはエリという大祭司が出てきます。彼はまだイスラエルの民達が王を求める前から40年にわたりイスラエルをさばいていた指導者でした。大祭司ですから、その指導は国の具体的な事柄のみならず、まさしく霊的なことにまで及びました。その大祭司エリのもとに幼い時から寝泊りして、薫陶を受けて育ったのがサムエルです。

エリは大祭司ですから全てのイスラエル国民に知られている人で、その働きも民を代表して幕屋の至聖所に入るような人でした。しかし、その彼には問題がありました。それは彼の家庭の問題でした。それは彼の二人の息子の問題でした。祭司のはたらきとは世襲でしたから、この息子達も父の跡を継ぐことを望まれていました。しかし、彼らは民が神様に犠牲として捧げる肉を横取りし、そのことに対して民が意見を言うと、それを力づくでも取り上げようと民を脅し（サムエル上2章12節-17節）、またある時は主の宮に仕えている女達と関係をもつような子達だったのです。聖書は彼らを「**エリの子らは、よこしまな人々で、主を恐れなかった**」（サムエル記上2章12節）と記しています。そして、エリも大祭司でありながら、神様よりもこの子達を重んじ（2章29節）、人がこの子達の噂をすることを聞くにおよんで初めて子供を戒め（2章24節）、さらには、これらの悪事を知りながらも子達を止めることもしなかったのです（3章13節）。

ですから、神様はこのエリの子達ではなく、エリの後継者としてサムエルを立てたのです。このサムエルがエリに仕えているまだ幼少の時に、神様は夜中に彼を何度も起こし、話しかけます。寝食を共にしていたエリは神様がサムエルに何を伝えようとしているのかサムエルに問います。その時、サムエルが神様から受けたメッセージは「**13 わたしはエリに、彼が知っている悪事のゆえに、その家を永久に罰することを告げる。その子らが神をけがしているのに、彼がそれをとめなかったからである。**

**14 それゆえ、わたしはエリ之家に誓う。エリ之家の悪は、犠牲や供え物をもってしても、永久にあがなわれないであろう」**（サムエル上3章13節、14節）というものでした。

このようなことを自分の師に告げることはとても辛いことですが、幼子サムエルはエリにこのことを告げ、エリも弁解の余地が自分にはないことを知っていたのでしょう、その神様の言葉を受け入れたのです。そして、エリもその息子達もこの言葉が言うように悲しい死を迎え、サムエルはエリの跡をついでこのイスラエルを導く指導者となりました。聖書はエリに代わったサムエルについてこのように評価しています「サムエルは育っていた。主が彼と共におられて、その言葉を一つも地に落ちないようにされたので、

**ダンからベエルシバまで、イスラエルのすべての人は、サムエルが主の預言者と定められたことを知った」**（サムエル記上3章19節、20節）。そして、このサムエルは後のイスラエルの初代の王、サウロと二代目の王となるダビデに油を注ぐ人物となるのです。

しかし、このサムエルにも問題がありました。何だと思いませんか。それはエリと全く同じ問題でした。「サムエルは年老いて、その子らをイスラエルのさばきづがさとした。長子の名はヨエルといい、次の子の名はアビヤと言った。

**彼らはベエルシバでさばきづがさであった。しかしその子らは父の道を歩まないで、利に向かい、まいないを取って、さばきを曲げた」**（サムエル記上8章1節－3節）。

サムエルは幼少の時に、エリの息子の罪に対する神様の厳しい言葉をエリに伝えたのです。エリの息子がどんな悪事をしていたかということを知っていたのです。師匠であるエリの子達に対する対応を間近に見聞きしていたのです。しかし、そのサムエルの子達も神様に喜ばれるようには育たなかったのです。

先にイスラエルが王を求めたその理由の一つに「サムエルが高齢になっていた」ということをあげましたが、それだけではないとお話しました。それでは他に何があったのでしょうか。その時、イスラエルの長老たちはサムエルに言ったのです「**あなたは年老い、あなたの子たちはあなたの道を歩まない。今ほかの国々のように、われわれをさばく王を、われわれのために立ててください**」（サムエル記上8章5節）。サムエルの子達は父サムエルと共に、さばき司としてイスラエルの国政に直接、関わっていたのです。もし、彼らが父の信仰をしっかりと受け継いでいたのなら、イスラエルは王を求めずに預言者の言葉を聴き、主を中心として保たれたかもしれません。そして、それはエリとその子達にしても同じことが言えるのです。

皆さん、エリは大祭司、民を代表して幕屋の至聖所に入ることができる唯一の人であり、サムエルの名声は全国に鳴り響き、彼は国の王達に油を注ぎ、その王としての任職を神の前に祈るような人です。彼らは国について論じる資格があり、国家の行く末にも影響を与えるような人達だったのです。しかし、この二人ともがその家庭に問題を抱えていたのです。国政に関わるような人でありながら、彼らは一番、身近なわが子を育てることができなかつたのです。

世の中には社会的には成功しているという人がたくさんいます。多くの人がそのことを知り、彼らの手腕は称賛されます。しかし、誰もその彼らの家庭のことは知りません。ビジネスにおける顧客は満足し喜んでいますが、その家庭では涙を流している者がいることを誰も知りません。1000人の部下を指導しながら、数人の家族の関係が壊れてしまっているということあるのです。

この度、13歳となる姪の突然の死を通して教えられました。弟夫婦にはこの姪以外にもう一人、七歳の娘がいます。彼らは4月4日、まだ春休みであったということもあり、近所のファミリーレストランで食事をとり、そしてお花見に行きました。花見ができる場所で、姪は自分は車でやすすんでいると言って家族を離れている間に、彼女は天に召されました。弟夫婦は言うておりました。「あのファミレスでの食事が最後の食事となりました」。そう、彼らが食事をしていた時、その二時間後に起こることなど誰も考えませんでした。しかし、彼らが言うように確かにその食事は最後の

食事となったのです。時にこのようなことが私達の間で起こるのです。そして、このようなことを予め察知する能力を私達は有していないのです。私達は一時間後に何が起こるかということも知らずに生きているのです。このことはあの大地震の状況にも当てはまるでしょう。あの地震の前日にそのことを察知していた人は誰もいないのです。そして、いったいどれだけの人が今、「あの時があの人との最後の別れとなったのだ」ということを悲しんでいることでしょうか。私達には「失ってはじめて分かるもの」が数多くあるのです。私達がこの地上で生きる限り、このようなことを私達は避けることはできないのです。

「家族を養うためなんだから仕方ないだろう」「そんなことを言っていられない、俺は忙しいんだ」「それは価値観の問題だ」と言われれば、まさしくそのとおりです。しかし、私達が信仰の目でこれらのことを見つめるのなら一つの事実に気がつきます。それは「自分の仕事は自分で選んだものである」ということであり、それに対して「家族は神様が私達に与えてくださったものである」ということなのです。そう考えますのなら、私達が自らの仕事を理由に家庭をないがしろにする理由はありません。そして、私達の家庭が主にあって育まれるのなら、実はそのことこそ、私達がどんなに大きな事業を成し遂げるよりも大切なことをしているのであり、このことこそがこの世界に大きな影響を与えていくことになるのです。

歴史に「もし」はありませんが、もし、エリヤサムエルが家庭を治めることができたなら、イスラエルは王を立てる必要がなかったかもしれません。このように私達の家庭と国は断絶しているのではなくて、それはつながっているのです。確かに一つ一つの家庭は小さなものであります。しかし、その家庭こそが私達の世界の最小単位の社会であり、その社会の集まりこそが国家なのです。「世界平和」が叫ばれますが、このことの実現は「神と共にある家庭における平和」の先にあるということに多くの私達は気がついていないのです。

主にある皆さん、それにしましても、あえて言うまでもなく、このことは何と私達にとって大きなチャレンジなのでしょうか。まさしく「主よ、誰がこのような役目にに当たることができましようか」という思いがします。このことは神様の知恵と力と愛がなければ全うすることなどできないのです。ですから、私達は日ごとに主の前に、必要な助けを求めようではありません。

ませんか。過ぎてしまったことを全て修復することは難しいかもしれませんが、しかし、大切なのはこれからなのです。エリもサムエルもこのことにおいてどんなに悩んだかと思うのです。私達の家庭環境はそれぞれ異なりますが、私達はエリとサムエルの痛みを無にすることがないように、このことからしっかりと教訓を得ようではありませんか。

今日はイスラエルの新しい国のかたちについて、その背後にある人間の心についてお話しました。その王政にいたる民の心を知ることにより、今、私達が国民として属している国について、また世界中の国々について、まさしく聖書を通して、それらを見直すことができます。聖書を神の言葉として信じている私達にはこのことが託されているのです。このように聖書に向き合っていきますと私達が抱えている問題の本質というものが見えてくるのです。私達なぜ、そのようなことが起きているのか、その背後にある人間の心を見つめなければなりません。そして、そのような国に住む私達はどのように生きるべきかをしっかりと決断しなければなりません。私達は現在、神を閉め出そうとしているこの世界の現実をしかと見つめなければなりません。サムエル記を読んでいきますのなら、王政が民にもたらしたものがどんなものであるかを知ることが出来ます。その歩みを知るのなら、私達がこれからこの国で見聞きすることも驚き怪しむようなことではないのです。既に聖書にはそのことが書かれているからです。

そして、同時にイスラエルという国が直面していた変化の時に、聖書はその渦中にいた者達の家庭に目を注いでおられたことを忘れてはなりません。人は大きな夢をもちます、国を自ら動かしたり、会社をもち、経営するというようなこと、新しいプロジェクトに対して辞令をいただくことは私達を魅了することでありましょう。しかし、それ以上に神様から直々に託されている者達に私達の心に向けることはもっと大切なことなのです。

ゆえに今日のタイトルは「家を治め、国を治める」としました。そう、どちらも私達にはとても大切なことです。でも、そこにあえて順序をつけたのです。国の行く末がどのようなかたちを形成していくかということは、一つ一つの家庭の中心に主なる神様を置いていくことにかかっているからです。「国の情勢がいい時も、悪い時も、将来を安心して展望できる時も、これからどうなるのかと不安が心に広がる時も」、私達が主にあって日々、なすべきことは昔も今も変わらないのです。お祈りしましょう。